

## フランス宮廷衣裳の復元研究

—計測方法と資料の整理—

伊豆原 月 絵  
高 木 麻 里  
澁 谷 摩 耶  
齋 藤 久美子  
百 武 真友美

### 要旨

大阪樟蔭女子大学と神戸ファッション美術館の学館協働事業として、神戸ファッション美術館の収蔵品について、平成 19 年度より 18 世紀のフランス宮廷衣裳のドレスの織物・刺繍・装飾・縫製の復元を行っている。

復元研究の最終目的は、第一次資料を基に、美意識を支えた縫製・構成技術、ドレスのフォルムから身体のフォルムを、また、染織の色彩と紋様から意匠や象徴性などを解明することで、往時の求められていた美意識を明らかにすることである。

復元研究では、19 世紀末以前の衣裳を対象とする服飾美学、服装史、構成学の既往研究のほとんどが、美術館、博物館の展示ボディに着装されたドレス表面の計測結果や図像資料から、また、欧米の文献を基にパターン（構成図）作成を試み、復元製作をしているのが実情である。なぜなら、現存する歴史衣裳は少なく、華やかなるロココ時代の宮廷衣裳にいたっては、日本のみならず世界でも数十点に満たない。したがって、第一次資料を基にした復元研究は、少ないのが現状である。

このようなことを鑑み本論文では、復元製作において、最も重要な情報収集として、18 世紀のドレスの文献調査に併せて、保存状態の優れた神戸ファッション美術館所蔵の 18 世紀に製作された女子のフランス宮廷衣裳を第一資料とし、計測調査（1 着のドレスの計測した箇所は、10,000 箇所以上）とその記録方法に重きを置き、第二次資料作成の方法について述べた。

### 1 はじめに

筆者らは、大阪樟蔭女子大学と神戸ファッション美術館の学館協働事業として、神戸ファッション美術館の収蔵品について研究を行っているが、平成 20 年度は、特別研究助成を得たことから、この収蔵品のうち、フランス宮廷衣裳（ロココ時代）の代表的なドレスであるローブ・ア・ラ・フランセーズ<sup>1)</sup>、図 2 のドレス（織物は、1740 年から 50 年に製作）を復元した。

この復元ドレスは、1910 年ごろより、フランスで最も多く製作されたとされるローブ・ヴァラント<sup>2)</sup>の特徴を兼ね備えている。この織物の復元に際しては、紋様別のデータ、色彩のデー

タを作成し、そのデータに基づき、ジャガード織りの専門家に依頼し復元した<sup>3)</sup>。

また、アンガジャント（飾り袖）のレースは、往時の技術に基づいて作成されたフランス製のレースを購入したが、ドレスの縫製および装飾部分の刺繍<sup>4)</sup>、フライフリンジ<sup>5)</sup>、ボビンレースは、筆者らが装飾を施した。

復元研究では、19世紀末以前の衣装を対象とする場合は、服飾美学、服装史、構成学の既往研究のほとんどが、美術館、博物館の展示ボディに着装されたドレス表面の計測結果や画像資料から、欧米の文献資料を基にパターン作成を試み、復元製作をしているのが実情である。なぜなら、現存する歴史衣装は少なく、華やかなるロココ時代の宮廷衣裳にいたっては、日本のみならず世界でも数十点に満たない<sup>6)</sup>。そして、そのほとんどが未公開であり、展覧会などで展示されたドレスの外観を見ることはできてもドレスの裏側などの細部を確認する機会は少ない。厳密な復元製作を行うには、第一次資料の細部にわたる観察と記録、詳細な計測方法の確立とそのデータ収集にあるといえるが、前述のように第一次資料を基にした復元研究は、少ないのが現状である。

また、既往論文において、計測方法に言及したものはなく、それらに記載されているパターンは<sup>7)</sup>、左右対称に描かれ、カーブもよどみない曲線で描かれている。しかし、人体やボディ（衣服製作用人体）に布を巻きつけて裁断する立体裁断<sup>8)</sup>の技法を考えれば、個人の身体の差がドレスに表れ、バストの左右の大きさの違いや、肩や首の筋肉のつき方の違いがみられるはずである。

このような理由から、既往研究のパターンが左右対称のよどみない曲線であらわされていることに、細部まで計測を行っていないのではないかとこの疑問が生じた。

以上のことを鑑み、本論文では、保存状態の優れた神戸ファッション美術館所蔵の女子のフランス宮廷衣裳の収蔵品から、1740年織物製作、1745年ごろドレス製作とされる収蔵品のドレスを資料1（緑色）とし、1775年製作とされる収蔵品のドレス（白色地）の資料2を第一資料とし、その計測調査（1着のドレスの計測した箇所は、10,000箇所以上）に併せて文献調査を行った。

復元製作に適した計測方法や手法に留意し、第一次資料を基に復元研究の基礎となる第二次資料の作成をした。本著では、復元研究における計測方法とデータ整理について述べる。



図1 神戸ファッション美術館収蔵品



図2 復元ドレス

## 2 研究の目的

第一次資料から、往時の美意識やその美意識を支えた染織技術、縫製技術、構成方法、人体のフォルムなどを明らかにすることを研究の最終目的とし、本論文では、18世紀のロココ時代のドレスのサイズと構成方法を明らかにするために、計測方法と資料の整理保存の開発を目的とした。

## 3 研究方法

### 3-1 第一次資料の情報収集 ー写真・VDR撮影ー

第一次資料の情報を収集するために、マネキンに第一次資料のドレスを着装し、ビデオ、カメラを用いて、全体のフォルムを確認し、記録をした。

### 3-2 第一次資料の情報収集 ー実測ー

ドレスのサイズを把握するために、計測を行った。既往研究における復元ドレスの計測では、ドレスの表面にメジャーを当て、サイズ計測を行うことが一般的である。しかし、本研究の計測方法は、従来の一般的なドレス計測のように、尺取虫のようにメジャーを継ぎ足しで計測するのではなく、ドレスを平面に置き、基準線を決め、そこを基点に計測を行うことで、生地のおねじれや引っ張り方向による誤差を無くしたいと考えた。

また、基準となる箇所（後ろ中心、縫い代など）を決め、そこを基準線、もしくは基準点とし、そこから垂直に三角定規や定規を当て、図4のように、定規が動かないように錘に分銅を用いて、メジャーで計測を行った。また、背中心を中心に左右を計測し記録をした。

計測に際し験者は、白衣を着装し、第一次資料のドレスに、汚れ、埃などがつかないように留意した。また、資料に触れる時は、常に木綿の白手袋を着装し、小まめに手袋を替えることで、手垢による汚れの付着を防ぐだけでなく、長い保存の間についたドレスの埃や湿気を手袋に吸着するようにした。しかし、繊細な部分を計測および細部の確認をする場合は、布帛製手袋ではわかりにくいいため、医療用のシリコン製手袋を用いて作業を行った。



図3 三角定規と定規、メジャーで計測



図4 定規を固定するために分銅を使用

#### 4 計測方法と結果

計測の一例として、ドレス2のローブの裾部分の計測方法を以下に述べる。ローブを平面に広げ、ドレスの前を開け、裏面から計測を行った。裾部分の端から、後ろ中心（以下CB）に垂直に線を引き、そこを基準線として、CBの裾までの間を5mm間隔で計測した。

##### 4-1 ドレス2のローブの計測方法

左後身頃のCBから左脇との交点まで5mm間隔で116箇所計測を行い、後身頃と左脇の交点から左前身頃の交点までは、115箇所行った。左脇の交点から前身頃までを115箇所計測し、左半分部分の計測は、346箇所の計測を行った。

右後身頃のCBから右脇との交点まで5mm間隔で116箇所の計測し、後身頃と右脇の交点から右前身頃の交点まで115箇所、右脇との交点から前身頃までを112箇所、合計1,035箇所の計測を行った。ここからわかったことは、左右の裾上がりのカーブが異なり、左身ごろのほうが、15mm身ごろが広く、左右非対称であった。



図5 資料2のローブの裾部分計測方法



図6 資料2全体図

##### 4-2 ドレス2のローブの後襟くりのカーブの計測方法

ローブを平面に広げドレスの前を閉じた状態で裏面から計測を行った。

CBに垂直に線を引き、そこを基準線として、CBから左右の肩までの間を5mm間隔で計測した。右肩をa、左肩をbとし、CBから右肩aまで24箇所、CBから左肩bまで21箇所計測した。



図7 ドレス前部写真

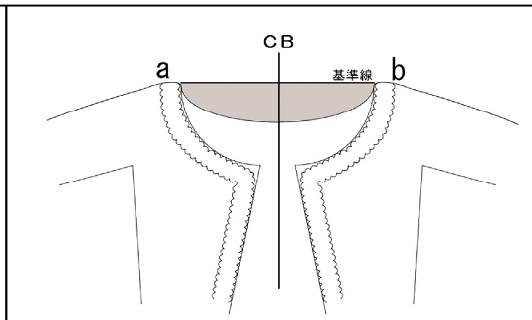


図8 衿くりと基準線

表1 右肩 a から CB までの計測値 (mm)

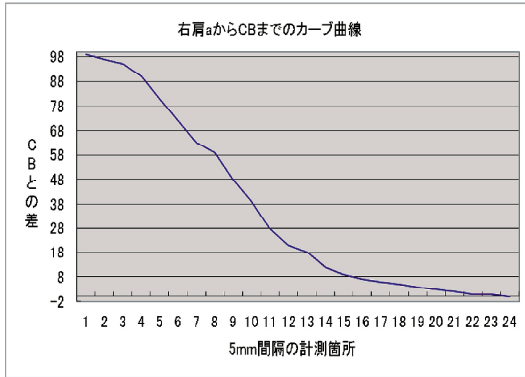


表2 CB から左肩 b までの計測値 (mm)

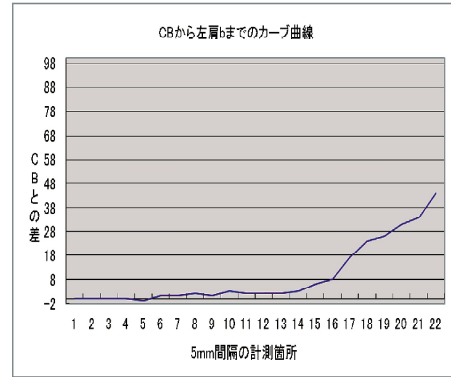


表1と2は、図7と図8の後ろ衿のくりの計測値を表にしたものであるが、表1は、CBに垂直に線を引いた基準線と交わる背中心のCBの数値は169mmであった。そのCBと計測箇所の差を求め、CBと計測箇所の差を求め、右肩aからCBまでの24箇所のカーブをグラフに表した。表2は、CBから左bまでの21箇所のカーブをグラフに表したものである。

以上のように資料を平面に固定しておき、生地織りに垂直に定規を合わせ布目の動くのを防ぎ、基準線を設けて計測することにより、計測の誤差を防ぐことができる。

また、表1と表2の曲線の違いからわかるように、左右は、非対称であり、ドレスの着装者の体型の違いを表していた。

### 4-3 アンダースカートのパターン作成

計測値からパターンを作成した。アンダースカートは、生地幅を生かして製作され、布の耳を縫い代に用いていた。また、上部のウエスト部分は、ギャザー<sup>9)</sup>が寄せられ立体に製作されていた。また、蔭襷<sup>10)</sup>の計測には、生地を痛めないように厚紙で定規を作成し計測した。また、ギャザーを倒す方向や角度などは、織物の紋様を参考に計測を行った。

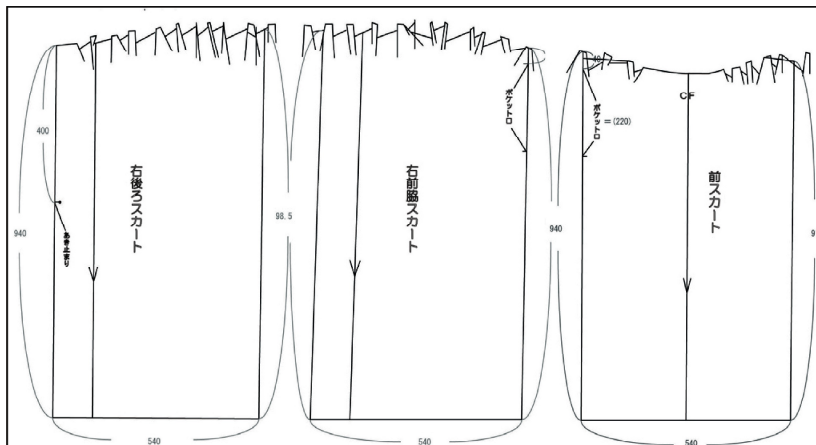


図9 計測値から割り出したアンダースカートのパターン

## 5 資料の整理と保存

### 5-1 第一次資料の情報収集 ー破損箇所の記録ー

第一次資料は、230年以上の時を経ているため、破損、虫食い、染み、ほつれなどが見られた。その箇所の記録をとり、裾や脇、CBなどを基準に計測を行い、大きさや種類などを記録した。また、計測数値のデータ整理のほかに、ビデオおよび写真撮影を行い、映像資料も作成した。図10、11は、ほつれ部分であるが、糸の素材、太さ、縫製方法などの仔細がわかり、復元製作をするには、貴重なデータである。



図10 ポケット口下部の糸のほつれ



図11 アンダースカートポケット

図12のローブの左前部分にみられる染みの大きさは、たて27mm、横25mmであり、染みの箇所は、ドレスの裾から染みの下部まで791mm、ドレスの裾（以下裾）から染みの上部まで820mmであり、ポケット口から染みまでは、97.5mm、前身ごろの接ぎ目から、染みの右側まで12.5mmの位置にあった。この染みの色彩は、赤みの紫の暗色であった。



図12 ローブの染み



図13 アンダースカートの前部分の染み

図 13 のアンダースカートの「下部の染み a」の染みの大きさは、たて 8.5mm、横 14mm、裾から染みの下部まで 268mm、裾から染みの上部まで 277mm であり、接ぎ目から染みの右側まで 222mm、接ぎ目から染みの左側まで 334mm の位置にあった。

アンダースカートの「上部の染み b」は、染みの大きさが、横 34mm、たて 24mm、裾から染みの下部まで 559mm、裾から染みの上部まで 584mm、継ぎ目から染みの右側まで 223mm で、継ぎ目から染みの左側まで 314mm であった。

この染みの原因となったものは、縦につながることから水性のものと推測される。また、染みの色が赤紫系の暗色であることから推察すると、ロココ時代は、国内のワイナリーも増え、その生産量も高いことから、この染みは、ワインであったとも考えられる。当時のドレスは、洗濯をすることがなかったため、洗濯後の変色がみられず、この染みのような赤紫色が残ったものと考えられる。しかし、ドレスの保存を考慮し、染みの詳細を調べることは難しく推測の域はでない。

## 5-2 整理と保存の方法 —ドレスの一般的な保管方法—

西欧のドレスを保存収納する場合は、西欧衣服の特徴とされる立体を保つために、内側に紙や綿などを詰めて整形し、ボディに装着させた状態を保持するようにしている。イギリス BBC の衣装部や国立民族学博物館の収蔵庫などでは、立体を保つために、ハンギングして保管している。特に、ローブ・アラ・フランセーズのように、スカートが横広がり大きなドレスの場合、保管場所の広さを要する。そのような問題に加え、なにより、ドレスの形態は保持できるものの、ドレスの総重量がハンギングしている肩にかかるため生地の負担は大きい。また、神戸ファッション美術館など国内の美術館では、立体を保持するために、薄様紙で詰め物を施し、紙製の箱に平な状態で保管をしている。

## 5-3 保存方法の改良

今回の研究では、ドレス計測を行う過程で、襷やタックに着目した結果、往時の人々がドレスを保存する場合は、襷が伸びないように、襷を折畳み、保存していたのではないかと考えた。襷やプリーツの伸びを防ぐために襷を畳むのは、既にギリシャのキトンの収納にも見られる。

このようなことから、図 5・6 のように、アンダースカートのウエスト部分の襷部分を折りたたんでみた。その結果、このスカートの幅は、3,240mm もあったものが、左右のスカートの襷部分をたたむと布幅一幅分弱の約 400mm にまで折り畳むことが可能になり、収納場所もとらず、襷が伸びずに保管することが確認できた。また、図 16 右上図は、裾方向から撮影したが、このように襷が重なりながら、このスカートを構成する織物に張りや厚さがあるため、折りたたんで収納してもシワになることがなかった。図 16 のウエスト（胴囲）方向から撮影した右下図では、ウエスト部分のベルト（生成り部分）は脹らみを保ち、下腹部を覆うスカートの前部のタックはつぶれずに畳まれていることがわかる。女性の丸みを帯びた腹部や臀部の形状を美しくみせるように考えられたであろう構成部分は、このように折畳む方法で、損なわれることがなかった。

図 17 は、資料 1 を広げたものであるが、ローブの裾幅は、5,000mm であり、ローブの着丈（縦）

は、1,600mm という大きなドレスであるが、図 18 のように、プリーツをたたみ、収納場所もとらず、保管後再び着装する時には、襷も伸びることがなく襷が美しく寄せられた。



図 14 アンダースカートの襷を折畳んで整理



図 15 ロープをたたむ 襷



図 16 左・折りたたんだアンダースカート 右上・裾部分から撮影、右下・胴囲より撮影



図 17 ロープを広げて撮影



図 18 襷を畳んで整理



## 6 結語

復元研究では、第一次資料のサイズ計測が最も重要であるにも関わらず、詳細な計測記録が現存していない。既往研究のように、いくつかの点と点を結び作られた直線ではなく、本研究では、立体であるドレスを平面に置き、生地織り目に考慮し、基準線を基に 10,000 箇所以上詳細に計測したことで、忠実にドレスサイズを記録することができた。その計測点を結び、曲線を表すことにより、第一次資料のパターン図を書くことが可能となった。また、以上のように詳細な計測をすることで第一次資料に忠実なドレスの復元製作が可能になったといえる。

現代の衣服のパターン図は、左右対称に作られているが、本研究の資料 1 と 2 のドレスの SB を中心にした計測値は、左右非対称であり、図 7、8 の後ろ衿くりの曲線が左右対称ではなかったことは、表 1 と 2 で明らかである。SB を中心に左右対称でなかったということから、往時のドレスは、着装者の体型に忠実につくられていたことがわかった。

また、詳細な計測によりドレスの立体を明らかにしたことで、着装者の人体の体型も明らかになり、往時の女性の求められていたフォルムもみえてきた。この論については、紙面の都合上、次の発表に委ねたい。

また、本研究で試みた計測の方法は、ドレスの全体の状況を把握することができた。細かくメジャーを当てていくため、縫製の始末や損傷部分にも注意が促され、現存する第一次資料を詳細に記録することができた。また、メンテナンスにも有意義であった。

今後の復元研究は、近似のドレスを製作することではなく、現存する実物ドレスを第一次資料とし、計測調査や記録保存などのドレスを復元するための過程が重要であると考えられる。

計測方法に留意し、細部にわたり正確に計測・記録した第二次資料を作成することに意義があり、その資料に基づき再現することが、今後の服飾研究の発展に重要である。

## 謝辞

学館協働研究において、貴重な資料を貸与していただきました神戸ファッション美術館と主任学芸員の浜田久仁雄氏に心から感謝申し上げます。

## 脚注

- 1) ロープ・ア・ラ・フランセーズ：robe a la francaise、ローブ [rove] とは、英語のドレス [dress] と同意語。羽織るガウン状のドレスにストマッカー (stmacher)、フランス語でピエス・DESTOMA (piece(/) d'estomac) という逆三角形の布を胸にあて、ペチコート [petticoat] を合わせる。18 世紀は、前開きのローブの下にはくスカートのことをペチコートと呼んだ。背中にプリーツをたたんだ裾広がりローブ・ヴァラントより発展したドレスである。
- 2) ロープ・ヴァラント：ローブ [rove] とは、羽織るガウン状のドレスであり、背中部分にプリーツをたたみ、肩から裾広がりにふくらむスリーブもしくは、ワンピース型の 1705 年～1715 年ごろに急速に流行したドレス。画家ワットーが好んで描いたことから、ワットーの髪とも呼ばれる。
- 3) この研究成果の復元ドレスは、平成 21 年 2 月 11 日から 3 月 29 日まで開催された「祝祭の衣装展ーロ

ココ時代のフランス宮廷を中心にー」東京・目黒区美術館において展示された。

- 4) 刺繍：サテンステッチ、ロングショートステッチ、チェストナッツステッチなどの技法が用いられ、織り柄の上から刺繍を施して立体感を出している。サテンステッチは、針で刺す間隔が同じで、表面に光沢がでる。ロングショートステッチは、サテンステッチと違い、交互に糸の長さを変えた技法。チェストナッツステッチは、針に糸を2回巻きつけ玉留めを施していき、小さな粒状を隙間なく埋める技法。
- 5) フライフリンジ：房状の糸やレース網、編み物の技法を用いて作られた、紐状の装飾品。織物に、この紐状の装飾を数箇所ずつ留めているため、織物から離れる部分が揺れ、軽やかな印象を与える装飾。
- 6) 日本で、ローブ・アラ・フランセーズを収蔵している代表的な機関は、神戸ファッション美術館がもっとも多く、次いで京都服飾文化研究財団、文化学園服飾博物館であるが、特別展示以外で収蔵品を鑑賞することは難しい。
- 7) パターン：〔pattern〕衣服を製作するための型紙のこと。パターンを用いた衣服製作を平面裁断ともいう。現在の既製服は、人間の身体の各部位（バスト・ウエスト・ヒップ、肩幅など）の計測数値を平面の型紙に表し、このパターンに基づき裁断し縫製されている。
- 8) 立体裁断：ドレーピング〔draping〕、立体裁断は、欧州の衣服製作の基本的な考え方であり、細かい人間の曲線は、パターンという型紙で表せないとし、着る人の身体やその人の体を模倣したボディ〔body〕（人形）に直接布をあて、裁断していく。
- 9) ギャザー：gather。ギャザーは「集める、縮める、寄せる」の意で、布を縫い縮めて襷を寄せること。
- 10) 陰襷：ギャザーを寄せた部分で、見えない部分の襷を陰襷という。

## 参考文献

- 1) DE BOYSSON Bernadette: Marie-Antoinette à Versailles, Le goût d'une reine, Somogy, Musée des Arts décoratifs de Bordeaux, 2005
- 2) FORRAY-CARLIER, Anne: Marie-Antoinette, Musée Carnavalet 1996、
- 3) ARRIZOLI-CLEMENTAL, Pierre: Marie-Antoinette, RMN, Grand Palais 2008、
- 4) LEVER, Evelyne: Marie-Antoinette à Versailles, Le goût d'une reine, RMN 2007、
- 5) JAMES-SARAZIN, Ariane: Gazette des atours de Marie-Antoinette, RMN, Centre historique des Archives nationales, 2006、
- 6) Nancy Bradfield: Costume in Detail Women's Dress, 1730-1930, Costume and fashion Press, 1981
- 7) Norah Waugh: The Cut of Women's Clothes 1600-1930, Theatre Art B00ks, 1968
- 8) Norah Waugh: Corsets and Crinolines, Theatre Art B00ks, 1954
- 9) Janet Arnold: Patterns of Fashion Vol 1, Quite Specific Media Group Ltd. 1964
- 10) Janet Arnold: Patterns of Fashion 1560-1620 Specific Media Group Ltd. 1985
- 11) AF EllenAnderson: Modden i 1700-arenne, Nationalmuseet, kobenhaven, 1977
- 12) Clare Browne: LACE FROM THE VICTORIA AND ALBERT MUSEUMU, V&A Publication, 2004
- 13) 丹野郁：服飾の世界史、白水社、1985
- 14) 伊豆原月絵：祝祭の衣装展ーロココ時代のフランス宮廷を中心にー pp. 98-99、目黒区美術館、2009